

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11596

研究課題名（和文）包摂的な体育カリキュラムの構築に向けて：クイア・ペダゴジー及びリテラシーを中心に

研究課題名（英文）Towards inclusive physical education curriculum: From queer pedagogy and literacy approach

研究代表者

井谷 恵子 (Itani, Keiko)

京都教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：80291433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ジェンダー・セクシュアリティの視点から日本の体育カリキュラムの「公的な知」を問い、カリキュラム改革への示唆を得ることを目的とした。具体的には、北米で進展している「身体・健康リテラシー」「クイア・ペダゴジー」の検討、「体育嫌い」、及び性的マイリティを対象としたフォーカス・グループ・インタビュー（FGI）の実施とジェンダー分析である。関係する学会での一般発表などを行い、論文2本が研究誌に掲載されたほか、複数の商業誌に記事が掲載された。研究成果の社会還元として、「沈黙する『体育嫌い』の声を聴く」という2種類のリーフレットを作成し、研究者・教員などに配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校教育では、男女平等カリキュラムの導入から30年あまりが経過しているにもかかわらず、女性の体育・スポーツ嫌いが男性よりも多く、小中高と学校段階が上がるにつれその傾向が強まるという現象がみられる。「体育嫌い」に関する先行研究は、能力主義など指導者の問題を指摘しているものの、カリキュラム自体を問うことはなかった。また、要因分析など量的研究が中心であり、設定された枠組みの外にある事実をつかめないことに限界があった。本研究では、FGIという手法を用いて、不可視化された「体育嫌い」の声を顕在化させ、ジェンダー分析を行なった点、及び性的マイノリティが直面する困難を明らかにした点に意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the "public knowledge" of the Japanese physical education curriculum from the perspective of gender and sexuality, and to make suggestions for curriculum reform. More specifically, this study aims to: (1) explore the ongoing discussions about "physical and health literacy" and "queer pedagogy" in North America; (2) conduct focus group interviews (FGI), targeting those who dislike physical education as well as sexual minorities in order to analyze gender and sexual politics of physical education. This research group has made several paper presentations at academic conferences and produced two peer reviewed journal articles. Multiple articles were also published on commercial media. In addition, our group also created two types of leaflets titled, "Listen to the Silent Voices of People Who Hate Physical Education", and distributed them to scholars and schoolteachers as a part of social contribution.

研究分野：身体教育学

キーワード：体育嫌い ジェンダー セクシュアリティ 体育カリキュラム クイア 身体リテラシー フォーカス・グループ・インタビュー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 体育カリキュラムと体育・スポーツ嫌い

スポーツ庁が実施した「平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、「スポーツ嫌い」は、中学生の 16.4% を占め、女子に限ると 21.5% であった。これを問題だと考えたスポーツ庁は、第 2 期スポーツ基本計画（2017~2021 年度）で「スポーツ嫌い」を半減する目標を立てたが、第 2 期の 5 年間で「スポーツ嫌い」の割合はむしろ増加し、女子中学生では 24.7%、4 人に一人が「嫌い」という結果になっている（第 3 期スポーツ基本計画, p.31）。本研究では、「体育嫌い」は体育カリキュラムなど教育政策の要因が強く関連し、ジェンダー・セクシュアリティの視点から実証的な示唆が得られるのではないかと考え、研究に着手した。

学校教育においては、1985 年の女性差別撤廃条約の批准に伴う男女平等カリキュラムの導入（1989 年）からすでに 30 年あまりが経過している。にもかかわらず、女性の体育・スポーツ嫌いが男性よりも多く、小中高と学校段階が上がるにつれその傾向が強まる傾向が見られる。井谷（2004, 2018）は、体育授業をはじめ学校体育で扱われる近代スポーツには、近代社会の発展を主導した「競争」や「勝利」などの男性的原理が内包されており、勝者となること、序列の上位にあることが「男らしさ」の証明と同時に公領域の価値として機能し、それが女性にとっては体育・スポーツを離れる原因ともなっていることを示した。

日本において、体育は初等中等教育の必修科目としての存在感があるだけでなく、部活動や学校行事とも輻輳しながらそこで学び活動する人々に正負のインパクトを与え続けている。教室での子ども達が互いに値踏みし序列化する「スクールカースト」がメディアなどで注目されるようになり、「さらし者」「公開処刑」などと強烈な表現によって序列と運動能力との関係が示されている。同様の報告は、「出る杭は打たれる 日本の学校における LGBT 生徒へのいじめと排除」（Human Rights Watch, 2016）においても見られ、LGBT の生徒を沈黙、自己嫌悪、時には自傷にまで追い込むという自己形成に及ぼす体育・スポーツ経験の影響力の強さが推測できる。本研究者が行ったこれまでの調査においても、運動やスポーツが自己の身体を通した明確なパフォーマンスであるために、人目に晒される嫌な経験として蓄積されると同時に、性別二元制・異性愛という規範から外れる存在への抑圧的な状況が明らかになった。

(2) 本研究の学術的独自性

国内での体育科教育やスポーツ参加に関する研究においては、前述のような周縁化された経験や声に関する研究は僅少であり、運動好きでより高い運動能力や体力を目指すという規範に沿った改善策や処方に視点が向けられてきた。多様性や共生を強調する教育やスポーツ界にあっても、「理想的な」身体や動き、関わり方に対する「公的な知」は強固であり、それゆえ規範に沿わない人々の声はかき消されてきたと言えるだろう。

戦後の体育カリキュラムは、民主的な国民形成や体力、楽しい体育など理念の変遷は見られるが、一貫して近代スポーツを学習内容として、また教材として用いてきた。前述のように、近代スポーツは男性原理を内包しており、身体を通したパフォーマンスとして学習者に刻み込んでいく特性を持っている。

これまでの「体育嫌い」に関する先行研究は、能力主義など指導者の問題を指摘しているものの、カリキュラム自体を問うことはなかった。また、要因分析や先行研究に基づく仮説や理論の検証など量的研究が中心であり、設定された枠組みの外にある事実をつかめないことに限界があり、不可視化された「体育嫌い」の声を顕在化させることには非力であった。量的研究は、先行研究の成果や研究者が設定した枠組みの外にある事実をつかめないことに限界がある。例えば、「体育嫌い」がなぜ女性に多いのか、指導者が技能にこだわるのはなぜか、体育カリキュラム自体の問題などは不問のままである。また、統計的手法による平均値や有意差など、全体の傾向を確認することに注意が向けられ、一般化から外れる個人の経験や声はさらに周縁化され、不可視化されることになる。この意味で、半構造化インタビューなどの質的研究は、対象者の自由な発言を重視することによって、ある事柄に対する個人の経験や意味づけをつかみとることができるという利点を持っている（フリック, 2016; 佐藤, 2010）。

2. 研究の目的

本研究では、競争的な特徴を持つスポーツ中心に構成されている体育カリキュラム自体に「体育嫌い」を生み出し、男女差を顕在化させる構造的な要因があるのではないかという問いを立て、社会変化に対応した新たな体育カリキュラムである「身体・健康リテラシー」及びクイア・ペダゴジーについて調査を行うとともに、体育において周縁化される人々の経験と意識についてフォーカスグループインタビュー（以下、FGI と略す）によって調査を深め、日本のカリキュラムの改革に向けて示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「身体・健康リテラシー」及び「クイア・ペダゴジー」について

先進的な体育カリキュラムを開発し、実践化している北米の体育カリキュラムを対象として、

フィールド調査、および研究者からの情報収集、文献調査を行うことを予定したが、コロナ禍による渡航制限などにより、フィールド調査などは実施できず、主に文献調査によって検討した。

(2) 体育において周縁化される人々の経験について

「運動・スポーツ嫌い」および「規範的でないセクシュアリティ」の2つの FGI を設定し、より活性化したインタビューデータの収集を行った。データ収集の手順は以下の通りである。

FGI 対象者は、新たな協力者の募集、及び H28-30 年度の研究の対象者を中心としたスノーボール法によって協力者を得る。

2 グループそれぞれに FGI を実施し、グループディスカッションの中で発言を活性化し対象者の経験や意識を掘り下げる。

FGI の音声データについて、トランスクリプション(テキスト化)を行う。

MAXQDA2018 Analytics Pro を研究者が共有し、テキストデータの分析を行う。

4. 研究成果

(1) 「身体・健康リテラシー」及び「クィア・ペダゴジー」について

「身体・健康リテラシー」について

『Margaret Whitehead による「身体リテラシー」概念の検討:日本における議論の動向を踏まえて』(三上純, 2021)として研究成果を公表した。以下、概要を示す。

本稿の目的は、近年体育・スポーツ分野で用いられている「身体リテラシー」という概念について、1993年にこの概念を提唱した Margaret Whitehead の議論を中心に、日本での議論の流れを踏まえて検討することであった。

Whitehead は、身体リテラシー概念を次の4つの主要な影響を受けて提示した。それは、(1)実存主義者や現象学者の哲学的著作、(2)幼児期の運動発達の重要性が忘れ去られているという認識、(3)身体活動から遠ざかる人が増加していることへの不安、(4)学校体育の方向性がハイレベルなパフォーマンスやエリート主義に傾いていることへの不安、である。このような背景から提案された身体リテラシーは、身体活動の本質的な価値を特定し、すべての人の身体活動の重要性を主張するための概念であった。

これに対して日本では、身体リテラシーという概念が主にアスリート育成の文脈で導入されていた。研究者たちは Whitehead による「生涯にわたって身体活動の価値を尊重し、責任をもって参加するための動機づけ、自信、身体的コンピテンシー、知識および理解」という定義が最も一般的であると主張しながらも、身体リテラシーを「運動能力」と同義としており、若者のみを対象とした概念として理解していた。

しかし、Whitehead による身体リテラシーの概念は、一元論、実存主義、現象学という哲学的基盤に基づいて、すべての人が生涯にわたって高めることができる能力として提示されたものである。その定義や内容は何度か修正されているが、二元論への批判と、すべての人のための身体活動の価値を擁護する姿勢は一貫していた。そのような態度は、パウロ・フレイレの批判的リテラシーやアマルティア・センやマーサ・ヌスパウムのケイパビリティ・アプローチの文脈で身体リテラシーを捉える必要があるとする、Whitehead の主張にも反映されていた。

Whitehead の身体リテラシー概念は、何らかの理由で身体活動への参加を妨げられている人たちが、なぜそのような状況にあるのかを問う機会を提供する。身体リテラシーは、短絡的な運動能力や競技スポーツの議論に終始するべきものではなく、すべての人にとっての身体活動の価値を重視した学校体育のあり方を考えるための概念である。

クィアペダゴジーに関する研究・実践動向

極めて近年から使用されるようになった「クィアペダゴジー」について、その概念やジェンダー・セクシュアリティ研究、包摂的な実践への示唆を得るために、以下に示した国内外での代表的な文献5点を検討した。

- 1) Deborah P. Britzman (1995) 'Is there a queer pedagogy? Or, stop reading straight' "Educational Theory" 45(2): 151-165.
- 2) Sykes, H (2011) Queer Bodie: Sexualities, Genders, & fatness in physical education. Peter Lang Pub Inc.
- 3) 渡辺大輔(2019)「教育実践学としてのクィア・ペダゴジー」菊池夏野ほか『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房. 134-165 ページ.
- 4) 堀川周平(2022)「気づく、立ち上がる、育てる」エイデル研究所.
- 5) 森山至貴(2019)「空中から鳩を取り出す—クィア・ペダゴジーに関するノート」ジェンダー研究 21 8: 49-60.

クィア・ペダゴジーの実践について具体的な検討を行なったいくつかの代表的な文献を検討すると、「普通の人々」が「マイノリティという他者」について学び「理解する」ことで多様性を「受け入れる」という教育に対する批判的な眼差しが共通して浮かび上がってくる。例えば、堀川(2022)は、性的マイノリティについての「正しい知識」を追加的に教える実践を「LGBT教育」と呼び、クィア・ペダゴジーと区別している。「LGBT教育」のアプローチは、同性愛嫌悪は

単に表現の不足、あるいは誤った表現の問題であるという立場をとり、また、異性愛者を教育の対象とし、同性愛嫌悪を「無知」の問題として扱う。すなわち、ゲイ・レズビアンも「普通」であることを学ぶことによって差別解消をもたらすことが期待され、たとえ同性愛嫌悪を解消できなくても、少なくとも当事者には「ロールモデル」を提供し、自尊心を高めることができる。しかし、このアプローチは「普通」の定義を広げて、ゲイ・レズビアンをそこに含めるだけで、特定の人々が規範化される一方で、他者が周縁化されるプロセス自体を批判の対象としていない。マジョリティの構築性やそれが守る特権性が揺るがされることのないこうした「LGBT教育」は、差別を生み出す構造を変えることがなく、「LGBT」を他者化することを教えてしまうという意味において、差別構造の再生産ですらある。

こうした「クィア・ペダゴジー」についてのこれまでの研究を体育というコンテキストで考えると何が見えてくるだろうか。ヘザー・サイクスの *Queer Bodies* (2011) は、体育の場でどのような身体が他者化され、「クィア」な身体とされるのかについて考察した数少ない研究の一つである。サイクスは、体育ではいわゆる LGBTQ+だけでなく、太った身体、障害のある身体もまた、体育の場で想定される理想の身体の外側に棄却され、またそこで想定される快楽 (pleasure) を壊すものとして排除されると考察する。

本研究グループでは、こうした先行文献に学びながら、「体育嫌い」という現象を通じて、日本の体育で想定されている規範的な身体はどのようなものか、どのような身体が問題化され、過剰に可視化されるのか、そしてまたどのような身体がそもそも存在しないものとして棄却されているのかについて、フォーカスグループなどを通じて明らかにしてきた。今後は、これらの先行文献とつながる海外の実践などについても考察しながら、全ての身体がmatterする体育教育のあり方や実践について明らかにしていきたい。

(2) 体育において周縁化される人々の経験

FGI の協力者は、近畿地域の大学生で調査への参加に同意が得られた 15 名の「体育嫌い」当事者である。協力者は、大学の授業等で調査概要を記した文書を配布して募集した。合わせて、本研究につながる H28-30 年度の研究プロジェクトの対象者を中心としたスノーボール法によって協力者を得た。その結果、規範的セクシュアリティの協力者 10 名と規範的でないセクシュアリティの協力者 5 名、合わせて 15 名の FGI 協力者を得た。規範的セクシュアリティの協力者は全員がシスジェンダー・異性愛で、女性 5 名、男性 5 名であった。規範的でないセクシュアリティの協力者は、多様なセクシュアリティで構成された。性的マイノリティについては、一般的には LGBT (レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー) や Q (クィア、クエスチョニング) を含めた LGBTQ という用語が用いられることが一般的であるが、本研究では、セクシュアリティの規範性 (基準とすること) に問題意識を持ち、性的マイノリティ全体を指して「規範的でないセクシュアリティ」、あるいは「規範的でない性」と表現した。なお、協力者の性自認や性的指向については協力者本人の語りによるものである。

カリキュラムの多層性と「体育嫌い」

『カリキュラムの多層性からみた「体育嫌い」のジェンダー・ポリティクス』(井谷恵子, 三上純, 関めぐみ, 井谷聡子, 2022) として公表した研究論文の概要は以下のとおりである。

先行研究調査を通じて、体育カリキュラム自体に「体育嫌い」を生み出し、男女差を顕在化させる構造的な要因があるのではないかという基本的問いを見出した。本研究では、カリキュラムの多層性に着目し、「体育嫌い」の当事者の経験を通してカリキュラムと「体育嫌い」の関係を検討することを目的とした。「体育嫌い」を自称する複数の対象者をグループ化し、フォーカス・グループ・インタビューにより、ディスカッションの活性化を図った。

実施した FGI とその分析を通して「体育嫌い」を生み出す要素として次の諸点を見出した。

- 1) 制度的なカリキュラムと実践されるカリキュラムの間に齟齬があり、体育の理念と実際との間に乖離が存在する。
- 2) 制度的なカリキュラムが競技的なスポーツを中心に構成されていることによって、実践されるカリキュラムでは、競争性やジェンダー規範が強化され、その結果嫌な経験や疎外感を生み出している。
- 3) 体育はスポーツパフォーマンスが明確に可視化され、それらに優劣の評価がなされる場となっており、学習者にとっては身体やパフォーマンスが他者にさらされることへのストレスが強まる空間になっている。
- 4) 男性の身体が基準になる傾向が強く、思春期の身体変化が女性にネガティブな経験となっている。

男性性の構築と「体育嫌い」

『体育におけるヘゲモニックな男性性の構築 : 「体育嫌い」の男性の声から』(三上純, 井谷恵子, 関めぐみ, 井谷聡子, 2022) として公表した研究論文の概要は以下のとおりである。

本研究の目的は、体育嫌いの男性の語りに基づいて、男性性間のヘゲモニー闘争のプロセスを分析し、闘争の結果として構築されたヘゲモニックな男性性が、体育における不平等なジェンダー関係をどのように正当化しうるのかを検討することである。本研究では、体育が嫌いな大学生 10 名を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。本稿では、5 人の男性 (シスジェ

ンダー、異性愛)の語りに焦点を当てている。

分析から、競争や勝敗を重視するスポーツが学習内容の中心に置かれることによって、彼らが体育で嫌な思いをしていることが明らかになった。また、このような体育の授業では、「男性はスポーツや身体活動ができて当たり前」という前提で教育実践が行われている状況があり、体育教師はスポーツが苦手な男子生徒に対して厳しく対応していることが理解できた。

生徒間関係については、体育において構築された運動能力に基づく男性間のヒエラルキーが、体育以外の学校生活でのヒエラルキーに直結していることが語られた。さらに、「運動技能の高さ」によって定義される体育におけるヘゲモニックな男性性に、異性愛経験の豊富さが付加されていることが示された。加えて、男性性間のヘゲモニー闘争が協力者たちの身体に及ぼす影響と、彼らが置かれた厳しい状況をどのように乗り切ってきたのかを検討した。

分析の結果、協力者たちの厳しい状況はスポーツと男性性の結びつきによって引き起こされていることが明らかとなった。そのため、スポーツと男性性をどのように切り離すか、あるいは体育の中心にスポーツを据えることが適切かどうかを議論する必要が見出せた。

5. 研究成果の社会への還元

本研究が対象とする「体育嫌い」については、体育指導者の知識や意識改革、またそれらに基づく体育実践の改善が何より必要であるととらえている。また、「体育嫌い」の当事者の中には、運動能力の低い自分自身に非があるととらえ、嫌な経験を封印し、沈黙している人も多く存在する。このような人々が声をあげ、研究や指導に関わる人々と手を携えて、制度や実践を変革する力になればと、2種類のリーフレットを作成した。

「沈黙する『体育嫌い』の声を聴く ジェンダー視点を中心に」、及び「沈黙する『体育嫌い』の声を聴く セクシュアリティの視点から」の2種類のリーフレットは、教員養成やジェンダーに関する大学授業などで使用し得るよう、「体育嫌い」の背景やFGIで収集した「体育嫌い」の声、学校体育を改善するための視点などから構成した。表現や用語など、一般向けにわかりやすさを心がけ、注釈やコラムなどを多用した。

また、本研究の広報用ウェブサイト「体育・スポーツのジェンダー・セクシュアリティのポリティクス---『誰も置き去りにしない体育』をめざして---」を作成し、論文などの研究成果や関係する文献・参考資料などを掲載し、作成したリーフレットや報告・資料集などについてもダウンロードできるようにした。

ウェブサイトのURL及びQRコードは次のとおりである。

<https://sites.google.com/view/pegp/>



「1. 研究開始当初の背景」に示した文献

フリック・ウヴェ；鈴木聡訳(2016)『質的研究のデザイン』新曜社。

Human Rights Watch(2016)出る杭は打たれる 日本の学校におけるLGBT生徒へのいじめと排除。(<https://www.hrw.org/ja/report/2016/05/06/288906>)

井谷恵子(2018)「教育とジェンダー 総論」「体育カリキュラムのポリティクス」「保健体育教員とジェンダー」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房。

井谷恵子(2004)「ジェンダーを生産する体育・スポーツ」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店。

佐藤郁哉(2015)「質的データ分析の基本原則とQDAソフトウェアの可能性」日本労働研究雑誌。No. 665/December 2015。

スポーツ庁(2022)第3期スポーツ基本計画。

(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm)

スポーツ庁(2017)第2期スポーツ基本計画。

(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 三上純	4. 巻 41
2. 論文標題 Margaret Whiteheadによる「身体リテラシー」概念の検討：日本における議論の動向を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スポーツ教育学研究	6. 最初と最後の頁 35～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7219/jjses.41.2_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子・三上純・関めぐみ・井谷聡子	4. 巻 Vol.20
2. 論文標題 カリキュラムの多層性からみた「体育嫌い」のジェンダー・ポリティクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ とジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 6-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18967/sptgender.20.0_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三上純・井谷恵子・関めぐみ・井谷聡子	4. 巻 Vol.20
2. 論文標題 学校体育におけるヘゲモニックな男性性：「体育嫌い」の声から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ とジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18967/sptgender.20.0_20	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 No.157
2. 論文標題 「99%」のための体育・スポーツはどこに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際人権ひろば	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 vol.27
2. 論文標題 オリンピックの理念と現実の乖離 人権問題、環境問題への着目から見えるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際理解教育	6. 最初と最後の頁 46-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 vol.6
2. 論文標題 「体育嫌い」とジェンダー・ポリティクス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エトセトラ	6. 最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 No.790
2. 論文標題 スポーツにおけるジェンダー平等のゆくえ : 女性差別発言の裏側から見えるもの	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊社会教育	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 第73巻7号
2. 論文標題 オリンピックにおけるジェンダー平等というレトリック	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人権と部落問題	6. 最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷聡子	4. 巻 1152
2. 論文標題 男女の境界とスポーツ 規範・監視・消滅をめぐるボディ・ポリティクス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 156-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷聡子	4. 巻 70-6
2. 論文標題 スポーツイベントにみるセックスとジェンダー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 417-421
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 50
2. 論文標題 多様性を考える視点「体育で誰が排除されているのか」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 941
2. 論文標題 ジェンダー・セクシュアリティの視点からスポーツを批判的に捉える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井谷恵子・三上純・関めぐみ・井谷聡子
2. 発表標題 カリキュラムの多層性からみた「体育嫌い」のジェンダー・ポリティクス
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三上純・井谷恵子・関めぐみ・井谷聡子
2. 発表標題 学校体育におけるヘゲモニックな男性性: 「体育嫌い」の声から
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関めぐみ・井谷聡子・三上純・井谷恵子
2. 発表標題 体育の空間と性別二元制-非シスジェンダー学生の語りから
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井谷恵子・三上純
2. 発表標題 「体育嫌い」の沈黙する声を聴く: フォーカスグループインタビューによる体育課題の探究
3. 学会等名 日本体育科教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井谷恵子
2. 発表標題 多様性・共生の視点からみた「東京2020」オリパラ教育の課題
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会大19回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井谷恵子
2. 発表標題 SDGsの達成に不可欠な目標5「ジェンダー平等」：誰一人取り残さないスポーツの実現に向けて
3. 学会等名 大阪体育学会第59回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井谷恵子・三上純
2. 発表標題 英語圏における身体リテラシーを中核とした体育カリキュラム：アメリカの動向を中心に
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三上純・井谷恵子
2. 発表標題 「身体リテラシー」概念の再検討：Aspen 研究所の報告書に焦点化して
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	井谷 聡子 (Itani Satoko) (30768263)	関西大学・文学部・准教授 (34416)	
研究 分担者	関 めぐみ (Seki Megumi) (20793045)	甲南大学・文学部・講師 (34506)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	三上 純 (Mikami Jun)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------